

大谷派慈善協会機関誌

# 救濟

一九二二年八月〜一九二九年二月

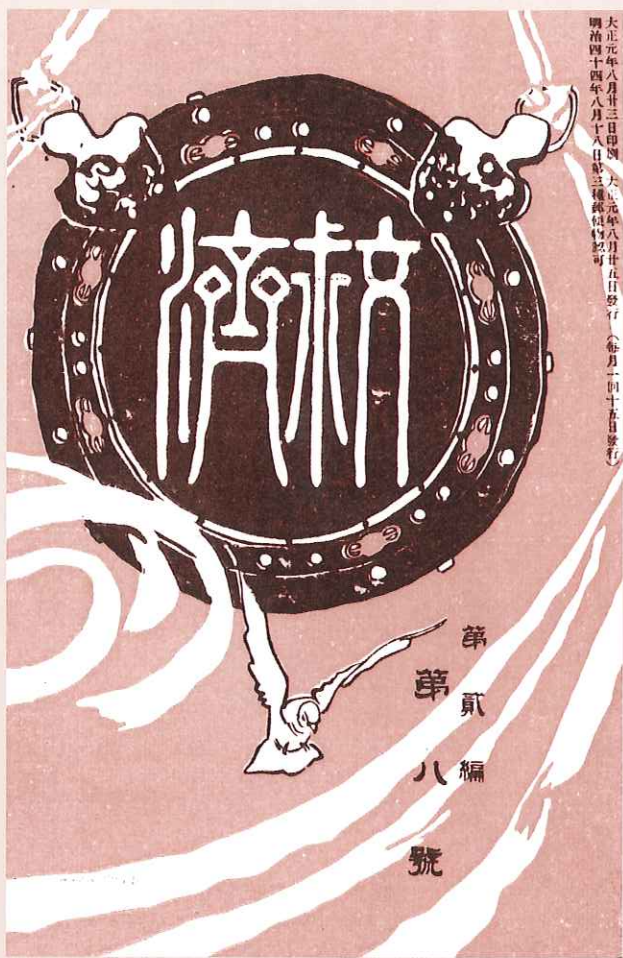
[新誌論]

全九卷十別冊

揃定価 本体二六万三〇〇〇円十税

解説 佐賀枝夏文 (大谷大学助教授)

推薦 吉田久一・長谷川匡俊



仏教者による社会福祉事業の研究に必備の資料!

明治維新後、国家の近代化の過程で噴出した矛盾である「貧困」を「救済」することは、近代宗教の実践的普及活動のひとつであった。

明治末年に創刊された『救済』は、真宗大谷派の僧・大草慧実おほくさが設立した福祉団体 大谷派慈善協会の機関誌である。

本誌には、大草の創設した無料宿泊所はもちろんのこと、貧困者の救済、刑期終了者の社会復帰事業、被差別部落の改善、禁酒運動、ハンセン病患者への対策、そして児童保護事業・知的障害児教育など、豊富な情報が掲載されている。また欧米での福祉事業の紹介も盛んに行われている。

近代の社会福祉事業については、これまでキリスト教の活動がよく語られてきたが、仏教者の新たな事業活動の展開については十分に考察されていない。仏教社会福祉の原点として、近代社会福祉史や宗教史のみならず、ひろく近代史研究に資する文献として復刻するものである。

不二出版

「推せんします」

# 先人の社会福祉思想に学ぶ

吉田久一 日本社会事業大学名誉教授

明治後期は仏教福祉の組織化がすすんだ時代であった。四二(一九〇八)年九月政府の感化救済事業講習会に出席した仏教徒は、翌四二年仏教同志会を結成した。四五年五月調査研究を目的に、渡辺海旭によって本邦最初の仏教徒社会事業研究会が結成された。真宗本願寺派では、三四年大日本仏教慈善会財団の設立が認可されていた。

この風潮の中で、親鸞の六五〇年恩忌を記念して四四年真宗大谷派慈善協会が設立され、大谷派法主の説示があった。

協会の機関誌「救済」は四四年八月創刊されたが、注目される論説が多い。その創刊号「会説」に、「吾等が救済事業は自ら独得の天地を有せるは勿論にして欧米の思想を祖述せるにもあらず、亦た政府の当局者の施設を模倣せんとするにもあらず、自ら信ずる所を守り行はんとする而已」という堂々たるものである。

本誌は久しく稀覯本として、その復刻を待望されたものである。今般、佐賀枝夏文氏の熱意によって出版されるという。誠に社会福祉研究にとって朗報である。仏教福祉関係者はむろんであるが、一般社会福祉関係者も、本誌を通じ優れた先人の社会福祉思想に触れられんことを念願し、一こと推薦のことばを記した。

(よしだきゅういち)

# 信仰と社会事業、仏教社会事業の研究に必備の文献

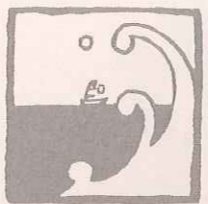
長谷川匡俊 淑徳大学学長・日本仏教社会福祉学会代表理事

このたび復刻の運びとなった大谷派慈善協会の機関誌「救済」の創刊から終刊に至る期間は、明治末から大正中葉にかけてのことで、ちょうど感化救済事業から社会事業成立へ移行する重要な時期にあたる。この点本誌はわが国社会福祉の系譜を語るうえで基本資料の一つであるといえよう。

また大正期は、前後の時期に比較して仏教社会事業が最も活況を呈した時期でもあり、近年高まりつつある仏教社会福祉の研究にとって好個の資料を提供してくれる。本誌を繙くことによって、特に巻頭の「会説」からは大谷派社会事業の理念や方針がうかがわれ、同時に他の論考からも同派が時代の社会的ニーズにいかに応えようと模索していたかを、読み取ることが出来る。多彩な執筆陣による社会事業の問題提起、実情紹介、新知見の開示、修養論のほか、「彙報」などの記事から当時の各種社会事業団体の動向を把握できるのも好都合である。

なお、協会設立及び本誌発刊と相前後して、一九〇一年には浄土真宗本願寺派が大日本仏教慈善会財団を設立し、以下、内務省系の中央慈善協会(一九〇八年)による「慈善」、渡辺海旭主宰の仏教徒社会事業研究会(一九一一年)と関連の深い「労働共済」、小河滋次郎らの救済事業研究会(一九一三年)による「救済研究」などが次々と設立・創刊されている。社会事業の組織化と研究の一段の飛躍を示すものだが、これらの機関誌と併用されることによって、より資料的価値を増すものと思料される。

(はせがわまさとし)



創刊号(一九二二年八月)より

## 救 済 第一巻第一號

會 説

### 時代の要求を論じて本會の設立に及ぶ

二十世紀の問題多し、雖も社会問題の解決程急要なるはあらず、げに社会問題の解決は吾人の頭上に與わられたる現下の一大問題にして、慈善救済事業到處に勃興し、社会の輿論をして之れに向はしめつゝあるは決して偶然にあらず、洋の東西を問はず社会問題の解決を相聯關して慈善思想の絶叫せられしは、時勢の然らしむる所にして、或は國家の事業、公共團體の事業として經營するあり、或は個人的に經營するあり、或は宗教的信仰の立脚地より經營するありて、其の内容一ならずと雖も、時代の要求に促がされて救済の實を擧げんことを期するに至りては、一也。畏れ多くも

淑聖文武なる我が今上陛下には曩きに勅語を煥發せられ、

世局の大勢に隨ひ國運の伸張を要すること方に急にして、經濟の狀況漸次革まり、人心動もすれば其

會 説

(一)

#### 「救済」関連年譜

- 一九〇一年 真宗大谷派浅草別院輪番の大草慧実、大塚に「免囚保護所」を開設
- 一九〇八年 大塚に「免囚保護所」を開設
- 一九〇八年 教誨師の職責をめぐり大草慧実と留岡幸助が対立、「果鴨監獄教誨師事件」へ発展。翌年留岡が職を解任され、真宗大谷派教誨師が着任して終結
- 一九〇九年 留岡幸助、果鴨に「家庭学校」を開設
- 一九〇一年 浅草別院貴婦人会を「婦人法話会」に改称
- 三月 奥村五百子、東京九段で「愛国婦人会」を設立
- 四月 大草慧実、安達憲忠と「無料宿泊所」を開設
- 一〇月 果鴨に「真宗大学(天谷大学)」開校
- 一九〇一年 大逆事件
- 一九一一年(明治44年) 宗祖六五〇大遠忌勤修、記念事業として「感化救済事業講習会」開催
- 同月 浅草別院で大谷派慈善協会が設立
- 八月 「救済」創刊
- 一九一五年 大谷派慈善協会会長に大谷登昭就任
- 一九一八年 米騒動
- 一九二一年 本山宗務機構に社会課を設置、武内了温就任
- 四月 同課に社会事業講習所を設置
- 一九二三年 関東大震災
- 一九二四年 大谷派社会事業協会が設立

# 救済

〔復刻版刊行概要〕

## 全九卷十別冊

- ▼体裁——菊判／上製／総四八八ページ
- ▼揃定価——本体二六三、〇〇〇円＋税
- ▼別冊——解説（佐賀枝夏文）・総目次・索引  
（別冊のみ分売可）本体一、〇〇〇円＋税  
ISBN4-8350-3112-1
- ▼推薦——吉田久（日本社会事業大学名誉教授）  
長谷川匡俊（淑徳大学学長）
- ▼配本——全一回配本

〈復刻版巻数〉 〔原本号数〕 〔原本発行年月〕 〔配本〕 〔定価〕

- 第1巻～第4巻——第二編第二号～第四編第二〇号  
一九二二年八月～一九二四年二月  
第二回配本＝〇一年一〇月  
定価＝本体七三、〇〇〇円＋税 ISBN4-8350-3107-5
- 第5巻～第9巻——第五編第二号～第九編第二号  
一九一五年二月～一九一九年二月  
第二回配本＝〇二年二月  
定価＝本体九〇、〇〇〇円＋税 ISBN4-8350-3113-X

### ◎関連図書のご案内

原胤昭 主宰／一八九四～九六六年刊〔復刻版〕

## 獄事叢書 全三巻・別冊一

本誌は、出獄人更生事業で知られるキリスト教教師・原胤昭が、監獄を囚人懲罰でなく囚人更生のために改良しようとして、こした監獄改良運動の機関誌である。  
発行は北海道樺戸集治監内の同情会。

- ▼別冊Ⅱ解説（室田保夫・総目次・索引）
- ▼A5判・上製・総一二七二頁
- ▼揃定価＝本体四五、〇〇〇円十税  
ISBN4-8350-0533-3

室田保夫 著

## キリスト教社会福祉思想史の研究

——「二国の良心」に生きた人々

大塚素・高橋元郎・松田三弥ら、戦争と人權抑圧に明け暮れた日本の近代社会で、各地の底辺の人々とともに歩み、日本社会への警鐘を鳴らし続けた個性的なキリスト者たちの思想と軌跡を検証。

- ▼A5判・上製・函入・五五二頁
- ▼定価＝本体二二、〇〇〇円十税  
ISBN4-8350-0308-X



室田保夫 著

## 留岡幸助の研究

近代日本における代表的な社会事業家・留岡幸助の前半生——岡山高粱での少年時代から、牧師・北海道バンド・米國留学・教師を経て家庭学校の創設、「人道」の発行まで——をあとづけた力作。

- ▼A5判・上製・函入・五五二頁
- ▼定価＝本体九五、〇〇〇円十税  
ISBN4-938303-24-8

2001.9

### 不二出版

〒113-0023 東京都文京区向丘1-2-12  
電話(03)3812-4433  
フアクシミリ(03)3812-4464  
振替00160-294084

●表示価格は、全て税別です。